



# 一秒の永遠



光野 朝風

長い青々とした田畑が続き、列車の窓ガラスを暗闇が塞いだ。

鏡のようになった窓ガラスには不安げな顔をした少年が映っていた。

目は弱々しく気を緩めると泣き出しそうな心持をぎゅっと引き締め保っている。少年の座席の隣にはボストンバック。自分の顔から目を背けるようにボストンバックのチャックを開けて中に入っているブランデーの瓶を手を突っ込んで握る。少しだけ出して眺め、また元に戻す。「未成年なのに酒なんか持っている」と見られてしまうのではないかと心配していた。車掌や乗客が近くを通るたびにチャックを閉めて、そわそわと外の景色を眺める。

家を出てきて列車に乗ってから何度も落ち着きなくブランデーの瓶を触っていた。またバックを閉めて暗い窓ガラスへと顔を向ける。赤いニキビがおでこに二つできていることに気がついた少年の顔を消し、真っ青に窓ガラスは塗りつぶす。

長く感じた、短いトンネルを抜けた。

崖下には海が広がっていた。光が煌々と透き通って射してくる。染み入るような紺碧の水平線と雲ひとつない青空が飛び立つ鳥の羽のように少年の胸に広がる。

――山を越えたんだ。

そう少年に感慨深く思わせた。海を見たことがなかったわけではなかった。たった一人で山を越えて、どこへ辿り着くかもわからない列車で海を目指した少年にとって、窓の外の光景は救いの光に等しかった。黒いもやのように底から溜まってきていた不安も、息を思い切り吹きかけて晴らしたようだった。海が流れていく。興奮してきた少年は思わず窓ガラスを開けて風をあびようと思った。じめりとした空気も季節の陽気が持ち運び、からりとした夏の風が代わりに抱きしめてくれる。息を吸い込み、胸を晴らしていく。風をあび、潤んだ瞳を乾かしていく。あて先のない少年に、夏は勇気を与えていった。

やがて海が徐々に遠くなっていくと、駅に着く。ホームには少年より少し年下に見える男の子を連れた親子が見えてくる。小学の低学年だなと少年は思った。窓ガラスを通り過ぎ、消え、列車は止まる。先ほどの親子が同じ車両に座り楽しそうに談笑している。笑いあう家族。屈託のない晴れやかな様子に、少年は嫉妬心を抱き「早く降りて欲しい」とさえ思った。

列車が動き出し、車両内には少年と家族しかいなかったが、すぐに若い女性が入ってきた。大きな麦藁帽子に、スリムジーンズを履いていた。何よりも少年の目を引いたのは左胸に花柄、その花柄の上にリボンがあり、リボンの尾が不思議な曲線を描いているプリントTシャツだった。ツンと張った胸の膨らみにはうっすらと水色のブラジャーが透けて見え、少年は恥ずかしくなり顔を赤らめ、勝手に走り出す鼓動を手綱を引っ張り静止させようとした。

白いうなじに、胸から腰にかけてのスリムなライン。顔は麦藁帽子で少し隠れていて、瑞々しい唇までしか見えないが、歩くだけで目を引くような女性だった。厚底のベージュの夏用サンダルの網目の隙間から素足が見えた。それ以外に特に目を引いたのは白い布にくるまれた大きな四角い板のようなものだった。列車は二列対面式の座席になっていて、女性は少年の斜め反対側の席に座った。ちょうど少年から女性の席が見える。

女性は背中に背負っていた大きなリュックを向かいの席に置き、布に包まれた板を大事そうに座席の下に立てかけて窓ガラスを開けて座り、麦藁帽子を取った。涼しげな目鼻立ちは自然なメイクで飾られている。顎の下あたりまで届くショートヘアが風になびいて少年の寂しげな隙間のある心を繊毛のようにくすぐっていく。

遠くにはなったが、少年の座席側に海が見え、女性側は山が見える。席が空いているにも関わらずわざわざ海側の席に座り山側を見るのは不自然だが、少年は映画の一コマでも見ているかのような女性の姿に、先ほどより余計に心をざわつかせながら盗み見るように眺めていた。

ふと女性と目が合い、少年は慌てて目をそらす。何事もなかったかのように取り繕いながら少年が海側の景色を見ていると、女性は白い布に包まれた板を持って少年の席の斜め向かいに座ってきて言った。

「君、さっきからじろじろ見て落ち着かないけど何？」

「い、いや、その……」

少年は驚きに喉を詰まらせたように口ごもった。女性が座った時、空気がふわりと柔らかくなるようだった。同級生から嗅いだことのない甘い匂いがさらに胸を叩き、舞い上がって天井に頭でも打ちそうな気分になっていた。

「君、もしかして家出？」

「え！」

突然凶星を突かれ「ど、どうして」と目を泳がせながら聞いてしまった。女性の言葉が大人の巧妙な「鎌かけ」という罠であることに気がつかずに、易々とはまってしまう。

「やっぱりね。なんかおばあちゃんや親戚の家に行くにしては随分そわそわしているし不安そうにしているし、時折迷子になった犬みたいにこっち見てくるし変だと思ったんだよね」

少年は動揺を隠せずに「ち、違うよ」と否定するが「じゃあ、君、どこに行くの？」と聞かれて言葉を失ってしまった。女性は指ひとつの動きでも見逃さんとばかりに凝視してくる。

「家出するのに当てもないなんて、喧嘩でもして飛び出してきたの？」

「え？ どうしてそこまでわかるの？」

女性は単純に思い当たることを口にただけだったが、少年の心は素直すぎた。溢れ出しそうな不安げな心を誰かに理解してもらいたいという寂しさもあって、女性の言葉にするすると胸の内を吐露してしまう。家を出る前は激しい啖呵を切り、矢のような勢いであらゆるものを貫かんとする勢いの欠片もなかった。

女性はクスクスと笑い、少年の目がふわふわと泳ぎ不安がありありと出てくるのを見て、「なんだ。カッとなって出てきたけど、泣いて帰るタイプか」と言ったことが少年の反抗心を煽り立てた。

「違う。僕はちゃんと一人で生きていくし生きられる」

少年の言葉に女性の顔からすっと笑みが消える。

「君、威勢だけはいいけど、いくつなの？」

「十五……」

消え入りそうな声で言葉をこぼす。

「うーん」と女性は海側を見る。何か見えたのだろうかと気になり少年も外を見る。

「君にはさ、まだ世界が広すぎるのがわからなくて、小さいものしか信じてないよ」

女性の言葉は嫌味にも聞こえそうだったが、少年の目には、また近づいてくる海や空の青さが飛び込んで来ている。女性の言葉は海に沈む魚や空に落ちる雲のように青さに吸い込まれて溶けていきそうなほど柔らかく感じ取られた。少年にとってこの場合いつも言われるようなセリフは「十五ではどこも雇ってくれない。学もないし、社会経験もない。年齢を偽ったとしても肉体労働も期待できない。そんなやつが一人で生きていけるとは馬鹿も休み休み言え」だった。上から押さえつけるような物言いや、人間性まで否定しかねないきつい言い方しかされてこなかった少年に女性の言葉はとても新鮮に受け取ることができた。

「凄いなあ……」

と少年が言われた言葉を空の下の自分のようにイメージしてみる。

「ん？何が？」

女性は気になり少年を見る。

「そんな風に、言われたことなかったから」

「うふふ」と女性は物静かに笑い出す。

「君、少し変わってるんじゃない？私もそうなんだけどさ。ああ、私ね、神芽輝実って言うんだ。君の名前は？」

「鉄岡俊太」

「私は輝実とかテルでいいから。君はシュンでいいかな」

「わかった。俺はテルって呼ぶ」

「ねえ、そういえばシュンって親心配して電話とかかけてこないの？喧嘩したからって向こうは子供じゃないだろうし親だから心配すると思うんだけど」

「携帯、川に捨てた」とシュンは薄い一枚の怒りの膜をかぶせたようにムツとしながら言う  
と「そっか。私と一緒に」とウィンクをしながら指を拳銃のように指した。

「え？捨てたの？」と偶然に驚くシュン。

「私は捨てたっていうか、持ち歩かないことにした。邪魔だから。人と人って、別に携帯なんかなくても繋がってられるし、逆にさ、携帯なんか使わないでも繋がってられるのが友達とか

だと思し、人間らしい生活できると思し。気分がいい時なんか、ノイズ入れられたらそれだけでも乱れるからさ、いらんだ。家で固定電話みたくなってる」

「どうして？」と聞きながら自分との違いに少しがっかりした。

シュンは気になった。シュンの環境にとって携帯電話はひとつのコミュニケーションツールになっている。周囲の友達はみんな持っているし、持っていないことで友達同士の情報から取り残され、情報から取り残されることは輪に入っていくタイミングが一步遅れることを意味する。あまり頻繁に友達の輪を広げないシュンでさえも、数少ない友達の突然の集まりに呼び出されることがあり、携帯電話がなければ青春の思い出さえ作りづらい。

テルは席を移る時一緒に持ってきた白い布にくるまれた板をさすりながら言った。

「私さ、こう見えても絵描いてるんだ。だからさ、私のリズム崩して欲しくないの。出ちゃうんだ。心の状態が全部絵に。私は私のリズムで生きたいし、私の中に色々なものが広がっている時に別の音とか騒音とかイメージとか他人の思いとかで乱されたくないんだ。だからせっかく……」

と窓へ手のひらをやり、

「……こうして大自然の中に来て自然を感じようとしているのに、自然じゃないものに束縛されるっておかしなことじゃない？だから嫌なの。仕事に急ぎ立てられるのも、誰かの飽くなき欲望のためにどんどん忙しくなるのも」

「かっこいいな。俺もそんな風に成りたいな」

シュンの軽率な言葉にテルは睨みを利かせた。何故突然睨まれるのか、まったく理解できないシュンはテルの圧倒するような鋭い視線にたじろぐほどだった。「ふう」とため息をついたテルの瞳は、憑き物が落ちたように元に戻ってくる。

「よく言われんだよね。ホント、何にも考えないでさ、簡単に言ってくれちゃうんだよね。だいたいそういう人たちってさ、自由に時間使えて自分のやりたいことをできて、自由に生きていけるって部分をうらやましいとか思って言っているとしか思えないんだよね。自分が束縛から逃れて自由を獲得することが、どんなに辛いことかやりもしないのに、動きもしないで言いたいこと言うんだ。夢見るみたいにさ、いいですね、とかさ、あーあ、色々思い出しちゃったよ」

「芸術家ってやつなの？」

「そう。今私一度喋りだすと止まんないかも。ごめんね」

シュンは首を振りながらも内心「気難しそうな人だな」と思っていた。他意はなくとも言葉に敏感に反応するテルの心は一体どうなっているのだろうと覗きたくなる好奇心もオープンに入れたパン生地のように膨れ上がってきていた。

気まずい雰囲気になりそうな会話もレールの上を走る列車の音が掻き消していく。心地よいリズムの中、伝わってくる振動や流れる景色が心地よかった。「あーっ」とテルが背伸びをする。

「初対面の、しかも年下の子にいきなり愚痴めいたこと喋っちゃうんだから、私相当溜まってるなー。あ、ここに座っていい？荷物持ってくる」

シュンの返事を待つ前に立ち上がる。その時布にくるまれた板も一緒に持っていく。置いていけばいいのにと思ったが、肌身離さず持っている姿に命と同じくらい大事なもののなのかもしれないと思わせた。

テルが立ち上がるたびに背中ブラジャーのラインや、座った時の胸のリボンが気にかかった。麦藁帽子のかかったリュックを席の横に置き、布にくるめられた板は大事そうに脇に抱えて座る。

「お待たせ。待ってないか」

と言いながらシュンの視線に気がついているのか、Tシャツの胸の上を両手でつまんで「気になる？」と聞く。

「え？ええと」と返答に困っているとシュンの勘違いを告げられる。

「このTシャツのデザインね、私がしたの。いいでしょ」

「あ、うん」とまったく違うことを考えていたシュンは恥ずかしさに顔を赤らめながら返事をした。「どうしたの？顔なんか赤くして」と何も気がついていないかのように聞いてくるテルに、からかわれているのではないかという気がしていたが、たとえそうであったとしても、と不愉快な気持ちが起こることはなかった。

はつらつとした少女のような印象さえも受けるテルには、少女にはない色気も同時に漂っている。一瞬物憂げに視線を落として、浮遊していくように何かを見つめる。視線を移していく一つ一つの仕草や軌道が、シュンの感じたことのない芳香を纏わせていて、心を奪われる時があった。

「ところでさあ」

とテルは話題を変える。

「さっき、君家出してきたって言ってたけど、本当に当てがないの？お金持ってるの？野宿でもするつもり？」

「あっ」とテルは左手を口に当ててから、右犬歯を見せて苦笑し「ごめん。なんかお節介だね。シュンみたいな子みてるとかまいたくなっちゃうんだよね」と微笑を向けた。

「何も考えてなかった。飛び出してきて、二十万円しか持ってきてないし、遠……」

「え！」と急にテルが驚いた声を上げた。

「二十万ってちょっと子供が持つにしては多くない？それとも最近の子供はそんなにお金持ってるの？」

先ほどからテルの口から「子供」という言葉が出るたびに神経が逆なでされるようだった。身を乗り出すようにして「子供じゃないよ」と言う。

たじろぐことなく微笑みで「子供よ」と返すテル。

「子供じゃない」

むきになって否定するシュンをテルはものの見事に迎撃する。

「自分で稼いだお金でもないんでしょう？自分の能力で得たお金とかじゃないんでしょう？そのお金の重みが少しでもわかるの？お金の重みってわかる？それなに？お年玉かなんか？」

シュンは杭を打たれるような衝撃に心が沈みこんでいきそうだった。

「お年玉だよ。貯めてきたやつ」

「ふうん。そんなにたくさん溜まるもんなんだね」

と感心したような納得していないような様子で口を尖らせて言うテルに「親父の財布から半分は抜き取ってきた」とは言えなかった。「お金の重みくらいわかる」と反論しようと思ったが、「子供の苦勞はたいしたことがない」と言われるのがオチのような気がして落ち込むだけだった。

「ねえ、それさ、帰ったら貯金しなよ。それで銀行通帳に記帳された数字を見て、絶対一桁二桁ゼロを増やしてやるんだって目標立てながら、お金に向かってありがとうって感謝しなよ」

シュンは考えたこともない提案に少しふくれた。なぜ面倒臭いことを繰り返していかなければいけないのか意味がわからなかった。お金は生き物じゃない。感謝をして逆にありがたがられることなどないと思っていたし、お金は使ってこそ価値があるものだと思っているからだ。買った物に価値があるのだと。シュンは少し怒りながら言う。

「貯金って、これから先どうやって生きていけばいいんだよ。お金使わないと何もできないだろ」

「いいよ。私が払うから」

「え？」

何を言ったか一瞬理解できずきょとんと口を開けてしまった。そしてもう一度脳内でテルの言葉を反芻させて、ようやく言葉だけは呑み込めた。

「え？払うって、何を？」

言葉の意味がまだ理解できず質問するシュンに「シュンの旅費とか宿泊費に決まってるじゃない。どうせ当てないんでしょ。旅は道連れ世は情け。知ってる？誰かと一緒のほうが心強いし、情がないと世は渡っていけないってことだよ。情けをかけるっていうのはね、心を尽くすってことだよ。お金でおごることが大事ってことじゃないから勘違いしないように」と畳み掛けるように言うが、突然のことに啞然とするだけで大事なことは聞き逃していた。

「ねえ、聞いているの？人生訓だよ」

指を立てて指示棒のように振る。

「じんせいくん？」

「昔の人の人生に対する知恵みたいなものだよ」

「ああ、説教のことか。よく親父とかお袋がうるさいからわかるよ。上から言うだけで何もこっちの言うことなんて聞いてくれない一方通行の会話だろ。そんなのいちいち考えてたら何もできなくなるって。だから俺はいい」

テルが黙り込んで目を細めてシュンを見ている。シュンにはテルの瞳の奥が悲しみをたたえ淀んでいるような気がした。

「な、なに？どうしたの？」

少し心配になりシュンが先に口を開く。

「誰かからね、何かを感じ取ろうとすることを拒否してしまうと、たちまち孤独を背負うことになるよ。思春期だから、自由にやりたいのを邪魔されてさ、しょうがないのだろうけど。自分が正しくて、世の中が間違っているみたいな考え方、私もしてたからよくわかるんだけどさ」

ふっとテルが笑う。シュンはテルの背負っているものが時折瞳に現れて、あれほど惹かれるような仕草をするのではないかと漠然と感じた。

「ああ、そうそう。説教女かもしれないけど、旅は道連れ、どうする？」

「いくよ。俺行くところないし、ここら辺詳しくないし」

「じゃあ、決まりだね」

テルは握手を求めてきたのでガッチリと握手を交わした。まだ人を心底疑うことをあまり知らない年でもあるシュンは素直にテルの好意を受け入れた。それは窓から吹き付ける心地よい車内の風がテルの髪をなびかせ、シャンプーの香りが素肌を滑るように香ってきたせいもあった。一人でいた孤独からすがりついたことではなく、「一緒にいて楽しい」「もっとこの人を知りたい」という好意的な好奇心を強く抱いたのであった。

二駅ほど越えて、車内の家族連れが降りた。乗ってきた時は不愉快だったのに、今ホームを歩く家族連れは幸せそうに見えた。誰かが一緒にいる気分を少し味わっただけでほんの数十分で気分が変わる心情にシュンは驚きを持った。テルは家族連れを微笑みながら見つめている。すぐ近くを歩いているのに、とても遠くを見つめるような眼差しで、家族連れが窓から見えなくなるまで目で追っていた。

「知り合いなの？」

テルがずっと目を離さないことが気になり聞く。

「ううん。そういうわけじゃないんだけどね……」

また一瞬瞳を落とし、シュンに見えないものを見つめる。そしてシュンを見つめて話す。

「ねえ、どうして家出なんかしちゃったの？喧嘩の理由は何？」

列車が動き出し速度が安定するまでの間、シュンは黙り込み渋々話し出す。

「親と、元々、仲良くなかったから。ああしなきゃいけないとか、こうしなきゃいけないとか、色々押し付けてくるんだ。音楽やりたいって言ったら怒って。お袋もわりと親父に賛成で、教育熱心っていうか、勉強しろってうるさくて、スケジュール表とか作られてその通りにやらないとヒステリックになるし、親父は親父で社会ではどうのこうの、学歴がとか職歴がとか、人生に傷つけてどうやって社会生活するんだとか、音楽の話なんてしたら、もう家中バトルで、ついにはせっかく買った練習用のサイレントギターも捨てられて、俺切れて、それで家出た。あの糞ヤロウども、最低だよ。なんであいつらが俺の親なんだろう。あんな親の下で育ちたくなかったよ。あんなやつら死んでしまえばいいんだ。マジうざいしさ、消えて欲し……」

言葉の最後シュンのトーンが上がってきて悪態に拍車がかかってくるとすぐさま「止めて」

と遮った。

「あ、ごめん、あのさ、シュンがどう思おうと勝手だけどさ、私の前で親を罵るのだけは止めてくれないかな。凄く気分悪くなる。シュンの気持ちはわかるよ。でも食べさせてもらってるじゃん。不満を持つのはかまわないんだ。でもさ、人を罵ったりするのだけはダメだよ。そんな癖つけたら……」

テルのあるひとつの言葉が引っかかり、可燃物のプールに引火したように燃え上がる。

「俺の気持ちがわかるって？何がわかるんだよ。会ったばかりなのに何を知ってるっていうんだよ！ふざけんなよマジで！何も知らないやつにわかったなんて軽口叩かれたくねえよ！説教したいだけかよ！」

テルは板を打ち付けられたように喋ることを止めてしまう。思いに耽ったように視線を落とし、どこか深いところを見つめ、窓の外を見る。海がまた近づいてきていた。すぐ近くに海岸線が見えてくる。テルの瞳から涙がすっと一筋落ちていくと、シュンの怒りは河に呑み込まれたように鎮火した。

「ご、ごめん。あの、言い過ぎたっていうか、悪かったよ」

以前にクラスで男子が女子をからかいすぎて泣かせたことがあったが、その時女子たちからの風当たりが酷く、一ヶ月以上もクラスの雰囲気気まづくなった。その時シュンは泣かせた男子のことを弱いやつを虐めたように見えて嫌な気持ちを持ったことを思い出した。今シュン自身が年上とは言え女性を泣かせてしまい、涙を見たことで穴に落ちていくような暗い罪悪感と責め苦のような短い沈黙を味わっていた。シュンはそれ以上声をかけることができない。

「いいんだ。そうだよ。説教臭い。なんかずっと本音で喋ることなかったし、なんか思い入れがさ、深くなっちゃうんだよね。シュン見てると。だからさ。あー、ごめんね。やっぱストレス溜まってんだよ。解放的な気持ちになってて、一緒に悪いものも出てきてぶつけちゃったかな。説教は止める。うん。旅は楽しく行かないとね」

涙を指ですっと拭い、微笑みを作る。テルの強さに、気を使わせてしまっているという申し訳なさがバケツの水を床へひっくり返してしまったように広がっている。

「ほらほら、そんなシオンポリしないの。あ、そうそう。私さ、絵描いてるんだけどね、それでね、ちょっと前にヨーロッパのオークションで六百五十万くらいで売れちゃったんだ。それでお金いっぱい手に入ったんだけどね、今度あれ作ってこれ作ってって引切り無しに電話かかってくるようになった。仕事がたくさん来るのは嬉しかったんだ。それまで無一文みたいな生活してて、本当に貧乏で苦しかったから。でもね、中にはさ、私使ってお金儲けようって人もたくさん寄ってきて、どこから調べたのか商品の宣伝とか勧誘とかの電話も多くなってさ、そういうの聞いてるだけで疲れてきちゃってね。これから行こうと思っているところは私の育った故郷みたいなところでね、旅館に泊まる予定なんだけど、そこは少し高台にあって、海が見えて、料理もおいしくて、楽しいんだよ。いい人たちばかり」

まくし立てるように喋るテルの表情は明るかった。「辛いこと過ぎたら、今度は楽しいこと待ってるから、ああよかったって思ってるんだ」と話す姿に悲しみを覆い隠すような痛みの陰りは見当たらなかった。

「強いね、テルって」

シュンが逆にテルの煌々と輝く明るさに照らされ目を背けたくなるほどだったが「そりゃあ、シュンより一回り近くも上だもん」とため息をついて肩を上げさに落とした。

「え？ひとまわりって何？」

シュンが言葉を理解できないと見ると、パッと目を見開いて見つめた後、「うーん」と斜め上を見てうなってからニッと笑い「まあ、ええと、いいじゃないの。忘れなさいよ。そんなこと」と左手のひらをシュンに向かって団扇のように扇ぎながら言った。シュンが何か喉元に突っかかったような様子を見せながら口を開きかけるとすぐさま「ああ！次の駅ね、駅弁がおいしいのよ！なんと夏限定！花火弁当！見た目よし味良しの五つ星弁当なんだよ！中にね、海の幸とか詰まって、ベリーグッドなのよ！シュンお腹すいてない？二つくらいいけるんじゃないの？」

まるでテレビショッピングに出てくる商品を紹介している人のようだ、と喋り止めないテルを見ながら思った。グイグイと相手のペースに乗せられて、いつの間にか自分の暗い気持ちや怒りが板を流れ落ちる水のように消えていく。気がついた時にはすっかり興味を持っていて凄くよいものに思えてくる。シュンは胸の内が柔らかく締め付けられるのを感じた。キュンとするっていうけど、こういうことなのか、と思うと急にテルが前の瞬間とは違って特別な存在に見えてきていた。

「あれ？お腹すいてないの？」

ぼんやりしていたシュンは「あ、ああ、すいているよ。朝の一番最初の列車に乗ってここまで来たから、それから朝から食べてないんだ」と少し顔を赤らめながら言った。

テルは顔を赤らめ少し俯いているシュンを見て、お腹がすいていることを言うのが凄く恥ずかしかったのかと勘違いした。次の駅に停車すると売り子が車窓に見えて流れていく。テルは窓から顔を出し「花火弁当三つくださーい！」と大声で叫んだ。ホーム中によく響く大きな声がシュンには少しだけ恥ずかしかった。まだ家を出てきたという少しばかりの後ろめたさが残っていたのと、大声で叫ばれたことなど一度もなかったせいもあった。目立つということに恥ずかしさを覚えていた。そのせいで弁当を三つ頼んでいることに気がつかなかった。

「あ、おばちゃん。お茶は二つでいいよ！」

よく通る声だった。窓から弁当とお茶をもらい勘定を払って二つシュンに渡すテルは「すごーい。両手に花火！」と言って満面の笑みを浮かべている。

「え？二つも？」

と気づくシュンに「育ち盛りの男の子じゃこれくらいじゃ足りないんじゃない？」と早々割り箸をパキリと割っていた。

「え？もう食べるの？」

「もう食べるけど。中、生ものだし夏だから早く食べたほうがいいよ」

次々とテルのペースで進んでいく。今まで自分のペースを邪魔されることに苛立ちしか覚えてこなかったシュンにとって、相手のペースに乗せられて心地よかったことは初めてだった。自分の意にそぐわないことばかりを強制されてきた、という記憶が強いシュンがまったく違う価値観を得た瞬間でもあった。

テルが弁当の包みを解いて蓋を開けると六角形の箱の中にびっしりとご飯が詰まっていた。中心はホタテを薄切りにしたものが八枚円状に乗っていて、ホタテの下にはサーモンがホタテの円から少々はみ出す程度に引いてある。その中心から花びらのようにボイル海老が六尾。海老の間をとび子や卵のチラシ、イクラが見えた。

「うわっ、おいしそうだし凄い綺麗」とシュンがテルの弁当を覗き込む。

「ね？綺麗でしょ。見た目よし、味よしの。これで千二百円。ボリュームもあるし豪勢だし納得の値段だよ」

「ふふん」と鼻を鳴らすが、いつまでも眼を離そうとしないシュンに「シュンは二つもあるんだから、そんなに人のお弁当うらやましそうに見ちゃダメ。私のなんだから」と弁当をずっと横にそらした。

シュンの顔にふわふわと笑顔が浮いてくる。人と食事をする時これほど笑顔で楽しい雰囲気があったらどうかと短い人生を思い返していた。家ではテストの点数や勉強の進み具合、友達との関係はどうなど、命令されて動いているような印象しか持ったことがなかった。友達との付き合いも本心からやっているのではなく、親に言われてやっているのだという気持ちだった。シュンの本心と上辺は常に一枚の幕で隔てられ、誰も自分の本心など知りはしないと冷めた視点を持っていた。学校でも自分の人との付き合いが、他人にも当てはめられる気がしていたシュンは、きつと相手も上辺だけで自分と付き合いしているのだろうと、どこかで思い込んでいた。

自分を隠す、という青春を送っていただけに、目の前の弁当のように心が花開くことはなかった。心の底が嬉しくて浮き立つという経験はシュンにとっては初めてのことだった。それだけにテルの弁当を見たにも関わらず弁当を開く楽しみが新鮮だった。割り箸を割る音さえも爽快に鳴り響いていくような気持ちだった。青空の下の列車。膝の上で昼間の花火を見る夢心地。窓から吹き付けてくる風。一息ごとに生まれ変わってくるようだった。

一口食べておいしいと感じたシュンは二口三口と急ぐように食べる。

「あ、コラコラ。ちゃんとよく噛んで食べなさい。もったいないから」

親にもよく言われた「よく噛んで食べなさい」の言葉。今のシュンには同じ言葉でも意味が違った。早く食事を終わらせて自分の部屋に行きたい。食事の時間に有意義さを感じなかったシュンはお腹を満たすという目的しかなかった。目的さえ達成されれば内容など、どうでもいいことだった。よく噛むことで食事の時間が長くなり、聞きたくもない説教や一日の行動の確認などされても苦痛でしかなかった。

しかし今は違う。よく噛むことでテルとの楽しい時間が長く過ごせる。言われたことに意義を見出せる。今度は少しずつ箸にとって楽しんでみる。ホタテのほんのりとした甘みがわかる。サーモンの塩気や脂にご飯が進む。口の中でとび子やイクラがぶちっと弾けてまるやかな塩気を広げさせる。ポイル海老もコクのあるうす塩味で食感がある。酢飯の味付けに海の香りがした。別の味もある。なんだろうと弁当を覗くとご飯とご飯の間にカニのチラシが挟んであった。噛めば噛むほど味が広がってくる。がっついて飲み込むだけでは一つも気にすることなく終えていたことだった。おいしい。味だけではない。おいしいとはこういうことだ、と思った。

次の瞬間胸の底がぐっと熱くなり、込みあがってくるものに身を任せ、泣いた。嗚咽しそうなほど感動していた。テルは驚いて「ど、どうしたの？そんなにおいしかった？」と聞いてきた。

「おいしい。おいしいよ。おいしいよ」

と言いつけるシュンの声は涙声に変わっていった。テルはその様子を一声もかけずに、じっと見守っていた。

「ごめん。俺、こんなの初めてだから」

「そっか。うん。よかったじゃない。お茶もあるよ。飲む？」

「うん」と涙ながらに受け取り一口飲むと苦味の中にほんのり甘さが広がる。いつも喉だけで飲み物を感じていたシュンにとって、今日のお茶は涙の一滴のような気がしていた。

テルも涙ぐんでいた。

「お弁当奢って泣かれたのは生まれて初めてだよ」と小さく笑った。

人前で泣くことはとても恥ずかしいことのように思っていたシュンは自分が人前で泣いたことにも新鮮な驚きを感じたと同時に、素直に泣けるほどの、心を許せる相手が傍にいる安心感を、とても尊い価値のように思った。

「あとね、駅四つぐらいかな。三十分位したら目的地に着くよ。そこからバス乗るんだ。うまく乗れるかどうか。一時間に一本あるかないくらいだから」

バスの本数を聞いてシュンは「本当に遠くに来たのだな」とますます実感した。都会や学生街は通勤通学のためのバスが一時間に三・四本はあるものだ。移動するだけで長々と待ちぼうけを食らうことはシュンには考えられないことだった。もし一人でいたら、待つだけで苛立ってきて、感情が掻き乱され一人で投げ出されたような惨めさに悲しみや不安が煽り立てられたらだろうが、テルと一緒に何時間でも待てそうな気がした。

人というものが嫌になり家を出てきたようなものが、人に救われている。子供は小さな世界観

を世界全体にまで応用させて広げ、時として誰よりも鋭く真実を突き、時として誰よりも愚かになる。しかしテルと出会えたのは、愚かさゆえの幸運だと言ってもよかった。テルは出会った時から薄々とそのことを感じてシュンを見つめていたが、当人は知る由もない。

お弁当を味わいながらゆっくり食べていく。よく噛んで食べる。水飴を流し込んでいくように時間の密度がゆっくりと満ちてくる。テルが今までの話をする。お金がない時はバイトをしながら、よく街に出て似顔絵を描くことをやっていた、絵を描く旅行も貯めたお金で出ていたこと。美大では天才と謳われながら美大を出ても不遇だったこと。それでも数年でなんとかなり、自分は運がいい方だったということ。十年かかっても一生かかっても恵まれない人もいる。まぐれかもしれないから、思い上がってはいけない。自分のリズムをきちんと掴むという目的も兼ねて今回故郷に戻ろうと思ったということ。話をしていると二つ目の半分を食べ終えたあたりでシュンはお腹がはち切れんばかりの満腹感を覚えた。

「ふうー」とお腹をポンと叩く。

「こんなにお腹一杯なの久しぶりかも」

いつもは流し込むようにして食べる。するとお腹がきついで満腹感がしっかりとこない。今お腹が一杯なのは食べ物のせいだけではないことがわかっていた。

「いつもなら全部食べられるのにな……」

とシュンがつぶやいたところで「ちょっとだけ手伝ってあげようか？」とテルが割り箸を手に持つ。

「テルって見た目に関わらず結構食べるんだね」

「あ、失礼しちゃうなー、こう見えても、ほんのちょっとは育ち盛りなんだから」

「え？育ってるの？」

大人になっても身長が伸びるのかと思ったシュン。

「うん。まあ、子供には関係ないところだけどね」

ニッと得意げに笑うテル。

意表を突かれ「え？」と首をかしげるシュンに「ううん。なんでもないよー」と巧みな肩透かしをかける。

「なんだよ。子供扱いして」

「何言ってるの。子供の癖に一」

にこやかに笑うテルを見ながら「どうしてだろうな」とシュンは思った。他の人には子供扱いされると腹が立った。懸命に生きて悩んで苦しんでいるのに大人も子供もあるかバカヤロウ、と思っていた。「子供」と言われるたびに反抗心を煽られ、大人に近づこうと足掻いていた。それがテルの言葉はじゃれる様な心地よさがある。本心から嫌味を言っている感触を一切受けない。不思議なものだな、と大人たちとテルを比べていた。

シュンが食べ終える頃テルも食べ終え「あー、お腹いっぱい。ごちそうさまー」と弁当の空箱をビニール袋の中に入れた。テルがシュンの食べる速度に合わせて食べていたことはシュンには気がつかなかった。

「おいしかった？今度は一人で食べに来れるようにしなよ」

テルの言葉に寂しさを感じたシュンは「え？一緒に来ようよー」と冗談めかしながら心中を探ったが「どうかなー？」とひらり交わすだけだった。

「まあ、シュンが一人でちゃんと来れるのを待ってたらおばあちゃんになっちゃうしね」

「あはは」と笑い飛ばされるシュンは真面目に「じゃあちゃんと自分で稼いで連れて行くよ」と言うが「おおー頼もしいー」と右人差し指でおでこを軽く突かれるだけだった。

打ち解けたように見えても大人と子供の差があるのかな、と漠然とした壁を感じていた。今のシュンにはテルとを隔てている「壁」の正体がわからなかった。

列車は進んでいく。車内のアナウンスが次の駅にもうすぐ到着することを告げると次の駅で降りることをテルは言う。二人が降りると小さな駅舎をくぐり、シュンは延長料金を払い、外に出る。

「あれ、何もない」

シュンの言葉に「何もないってことはないでしょ。都会っ子なんだから」とテルが言う。

周囲には建物がもちろんある。しかし都市の駅のように降りたら突然高いビルの群れがあるわけでも看板が所狭しと商品の宣伝をしているわけでもない。商品の看板は錆び付いていて、いつの年代のものか写実的に描かれている。小さな商店や食堂が並んでいて、空がよく見渡せる。天気も変わることがなく晴々としている。シュンから見れば人がおらず閑散としていて、動くものも特に見当たらず何も刺激がない。「何もない」という感覚は当然だった。遠くで床屋の三色ねじり棒がグルグルと回っていても、シュンにとっては気にならない。

「バス、ちょうどよかったみたい。あと三十分ぐらいしたら来るみたいだよ」

麦藁帽子姿に戻ったテルが停留所の標識柱に張ってある時刻表を見てきて言った。標識柱と言ってもポールに看板が付けてある簡易型の方で、看板も錆が目立ってきている。

「それ逃したらどうなったの？」

駅舎の日陰の中で待っていたシュンが戻ってきたテルに聞くと、

「一時間半後になるかな。暑いから駅舎の中で待ってようよ」

と言って布にくるまれた板をそっと置きながら駅舎の椅子に座る。

「ねえ、その大きな板、それって絵？」

聞きそびれていたことを興味本位で聞いてみる。

「そうだよ。絵。十代の頃から描いている絵」

「十代？そんなに長く描いているの？」

シュンは少なくとも五年以上は描いているのだろうなと感じた。二年という歳月でもシュンにとっては長すぎるほどの時間だった。思春期の一ヶ月は永遠かと思うほど長く感じるもの。途

方もない時間なのだと実感していた。

「そう。ちょっとやそっとじゃ終わらない、私にとっての大作なの」

ふっと瞳が深くなり、視線が一瞬落ちる。

「だからそんなに大切そうに抱えているんだね」

「そうだね。もしこれを失ったら、私の青春そのものを失ってしまうくらい大事なものだよ」

「そんな凄いものなんだ。俺も見たいよ」と、それほど大事にしているものならぜひ見てみたいという興味がわいた。シュンにとって興味本位もあったが、テルのことを知っていきたいという、突き動かされるような気持ちもあった。しかし「ダメ」とあっさり断られたことに諦めがつかず軽い気持ちで念を押してみる。

「ちょっとだけでも」

「ダメよ。シュン。すべてを見ることだけが思いやりじゃないよ。きちんと人の秘密も守れる男になりなさい。ね、お願い」

テルは微笑みながらも鋭い目で見据えてくる。時折テルが獲物を射抜くような目をすることに体が固まりかける。

「あ、うん。わかったよ。我慢する」

テルの瞳から張り詰めたものがずっと消えていくとシュンはため息をふつつく。

「いいこいいこ」と頭を撫でられると「なんだよ。子供扱いするなって」軽く手を払う。

「背伸びしたい年頃か。そうだよ。背伸び、めい一杯したいよね」

「背伸びじゃないって」

ムツとしながらテルを見るが、見透かすように微笑んでいて目を逸らした。

「ふふ。そういうムキになるところがまだ子供。本当に自信がある人は自慢したりしないし、人を貶めたりもしないし、さりげない強さを持っているものだよ」

随分遠い目標のようにも思われて肩を落としたと同時に、言葉をすんなり受け入れて考える余裕が自分にあることに驚いたが、今すぐには届かない目標を掲げられて歯がゆく、今すぐにでもなんとかかしたいテルへの思いとの葛藤が複雑に入り組んできていて、その場で地団駄を踏みたくなるほどだった。

シュンがぐうの音も出さなくなったのを見てテルも喋ることを止めた。夏が大合唱をするかのようにセミの音が響いてくる。駅舎の中は外よりかひんやりしているが、それでも汗が容赦なく流れてくる。

「いつも夏はこんなに暑いのか？」

シュンが耐えかねて聞くと「こんなもんじゃないかなあ。あ、なんか飲む？」と立ち上がる。シュンはコーラを頼み、テルはスポーツドリンクを選んだ。

「はい」とコーラを手渡す時、テルのTシャツが汗で少しだけ張り付いていた。体の線が余計に強調され、胸元の花柄リボンが栄える。その時初めて「抱きしめたい」という衝動が浮かび上がってきていたが、畏敬の念もあった。初めての魅力的な大人にどう接していいかもわからず仕舞い。あれこれ考えるだけで何をしたいかわからなくなりそうだった。

コーラのペットボトルの蓋を開けて一気に流し込もうとして咳き込む。「大丈夫？」と背中をさすられ胸が締め付けられる。背中をさする手が、そのまま恋心を撫でられているような心地になる。

「あ、大丈夫」

と言いながら無理にでも一気にコーラを飲み干し炭酸で涙ぐむ。

「凄い。コーラ一気飲みできるんだね」

見てほしいところはそこじゃないのに、と思いながらゲップを堪えきれずに口ごもりながら出す。テルがスポーツドリンクを半分以上残し、時計を見て「もうそろそろかな」と駅舎の出入り口に立ちながら外を見る。

少しして「おおー、時間通り」とテルが言うと「用意して。来たよ」と荷物を持ち始める。一緒に乗り込むと乗客は二人だけだった。途中の乗客のほとんどは老人ばかりで、シュンと同じ世代らしき人は一人として乗ってこなかった。どんどん見知らぬ地へと入っていく。一人ぼっちだったら何もわからなくてどうすることもできなかったなと民家のあまり見えなくなった田んぼや林を見ながら思った。一度トンネルを抜けて山側へと入っていく。涼しくはなっていたが、バスの中は熱気にあふれていて、シュンの汗は止まらなかった。三十分ほどで喉の渴きを訴えるとテルが笑った。

「後先考えずにやることも大事だけど、計画的に動くことも凄く大事なんだよ。両方使い分けられるといいね」

と言いながらスポーツドリンクのペットボトルを振った。

「少し分けて」とお願いするとテルは残りの半分を飲み「あと全部いいよ」と渡した。

男友達とも女友達ともやることのある「回し飲み」だが、「意識している人が口をつけた飲み物」となると違って見えてくる。別段意識していないと繕いながら飲もうとすると、逆にぎこちないだろうかと気になってくる。気にしないふりをしながらチラリとテルを盗み見てみると見られていて噴出しそうになった。

「な、何？俺が飲むの、そんなに珍しい？」

と平然としようとするが、突然核心を突かれる。

「ねえ、シュンって照れ屋？」

なんとかテルの質問を交わしたが、この言葉がシュンの感情を大いに煽ることになった。テルに対する気持ちが勝手な期待をたくさん連れてきて混雑を起こしていた。自分の気持ちが、ばれているのか、ばれていないのか、という二つの可能性の中で大きく揺れ動いていた。自分が意識しすぎているのか、それとも思わせぶりの言葉はこちらの本心を見透かして言っているのか。ば

れていないはずだと思いながらも、もう一つの可能性を恋の小悪魔がいたずらをしていた。

その後は落ち着こうと思っても、くすぐられているような、自分は落ち着きがないのではないか、という居心地の悪さがシュンを取り巻いていた。体に違和感があり、心が体を離れて勝手に走っていきそうな気がしていた。

また一つトンネルを抜けると海の匂いがした。「もうそろそろだよ」とテルが言う。到着して林を進み坂を少し上ると視界が開けてくる。「うわあ」とシュンは感嘆の声を出したまま、流れ込んでくる美しさに心を奪われた。

列車でトンネルを抜けたときに崖下に広がった景色と同じくらい美しい水平線と青い空が広がっている。

「ね、凄いでしょ。ここ、知る人ぞ知る秘湯がある旅館なんだよ。もう少ししたら見えてくるよ。部屋からも海が見えて大パノラマなんだよ」

今日一番の嬉しそうな顔をして言うテルにコクリと頷いて後をついていく。一向に歩く早さが落ちないテルに付いて行くが息切れを起こしていた。木造の建物が見えてくるとテルが「うわあ、懐かしいな」と感慨深そうに言う。

「早く行こうよシュン」と急かす。ようやく入り口の前まで来て、シュンは息を整える。テルも深呼吸をする。

中に入っていくと女将らしき着物姿の若い女性が恭しく膝に手を添えて「本日は当旅館へお越しいただき……」と挨拶しかけるがテルが大きな声を上げて「みゃーこちゃん！」と抱きついて言う。

「もー、そんな堅苦しい挨拶なんていいのにー、ホント久しぶりー。五年ぶり？いやー、美人。美人になったよー。すっかり女将らしくなって凄いなー」

テルのはしゃぎように驚いたようだったが、すぐに型を崩して女将は喋り出す。

「びっくりした。テル、物凄く垢抜けたね。今回は大出世おめでとう。ゆっくりして行ってね。あら？そちらの男性は？随分お若いわね。え？まさか新しい彼氏？」

「違うわよ！そんなわけないじゃなーい」

と大きな声で否定したことが何故かシュンには少しだけショックだった。テルはそのまま女将の袖を引っ張ってこそこそと話し出す。

「あの子一緒に泊めて欲しいんだ。お金は払うから」「え？お金なんていらぬわよ」「はいこれ」「え、いいっていいって」「そんなわけにはいかないって」「そう？でも空き部屋ないから相部屋になるわよ」「大丈夫だって。私強いから」「あ、そういえば黒帯だったっけ」「そうそう。また腕上げたよ」「それで、どうするの？」「明日さ、父さんとこ連れて行こうと思って」「え？パパのところ？」「そう。シュンって言うんだけどさ、家出してきたんだって。見せてあげようと思って」「そうなんだ。親心配しないの？」「ちょっとぐらいなら大丈夫じゃない？ということでさ、四日間よろしく」「わかった。まかせて」

ヒソヒソ話のはずが、よく聞こえてくる。「黒帯？」と想像もしなかった言葉に驚いた。「四日間よろしく」ということは明々後日にはここを出るのか、と寂しい気持ちを抱かせたが期限までにテルの気持ちを射止めるという決意も抱かせた。むしろその決意は叶うか叶わないかという

問題ではなく、途方もない夢を抱く憧れのような決意だった。

「お待たせー。紹介遅れたけど、こちらはここの旅館の女将の益田美也子さん。私のお姉ちゃんでもあるんだよ。にゃんこみたいにみゃーこっっていうの」

シュンは自己紹介をしながら、似てない姉妹だなと思った。背丈も顔立ちも苗字も違う。小柄だが立ち振る舞いがしっかりしているせいか凜とした感じを抱かせた。テルの歩き方がズカズカだとしたら、美也子の歩き方はそろりそろりと品のあるものだった。育った環境の違いによるものか、職業的なものか、と考えながらシュンは後を着いていった。

部屋に案内され、食事の時間や風呂の場所などを説明される。三つ指を揃えて挨拶して去っていく姿も見事だった。一つ一つの動きが洗練されていて見ているだけでも気持ちが悪くなってくる。

「凄いよねー。様になってるよ。女将になったのは最近だけど、十年以上も修行していると、あんな風に身についてくるんだねー。身体技術ってやつだな。うん」

と荷物を置いたテルは胡坐をかいて腕を組んで、テレビを見て一人で解説する親父のように頷いている。

「あの、お姉さんって言ったけど、あまり似てないね」

「うん。血は繋がってないんだ。明日私の家族に会わせてあげるよ」とニツとしながら言う。

シュンは笑顔の意味を考えた。両親に紹介されるのか。緊張するな。両親に気に入られるかどうか勝負の分かれ目だ、などと勝手に妄想を展開していると「食事の前に時間あるからお風呂入っておいで」と催促された。

部屋を出る際に「混浴じゃないから期待しないでねー」と声をかけられ、「期待してないよ！」と赤くなりながら否定した。風呂に行くまでに改めてじっくりと旅館を見回す。どれもこれも年季が入っていて年代を感じさせる老舗の旅館の威厳のようなものを醸し出していた。風呂はちょうど誰もおらず一人で満喫できた。露天風呂で顔を鎮めながらブクブクと口から泡を立てて遊んでみる。海の見える露天風呂でわざわざ意味のないことをするシュン。夕日が絞りたてのように雫を海に落としていた。

こびりついていた疲れが落ちていく気持ちよさとともに思い起こしていた。春に修学旅行に出たが、その三日分以上の密度で今日一日が過ぎ去ったことに幸運を感じていた。親に反発して出てきて夢のような一日を過ごした。両親のことを考えると点火したように怒りが燃え上がってくる。「あー！」と一人で叫んで湯に顔を突っ込みギリギリまで息を止め、心臓の鼓動が異常な速度で脈打つまで我慢してから顔を上げる。息を切らしながら、なされるがままの無力な自分に苛立ちを覚えた。テルにも尽くされっぱなしの状況に「早く大人になりたい」という気持ちだけが空回りしていた。

風呂を上がり少し風に当たる。新緑が風に揺られさわさわと音を立てる。

「ここには静かだな」と林の音に癒される。都会の喧騒とは違う。体をギシギシと圧迫するような音ではない抵抗なく寄り添ってくる感覚に浸っていた。深呼吸をする。湿度を含んだ緑の空気と微かな海の香りが肺に行き渡る。「こういうところでテルは育ったのか」と若干うらやましさも持った。

部屋に戻るとテルの姿が見えない。お風呂にでも行ったのかと部屋をキョロキョロ見回すと、

ふと布にくるまれた絵が目についた。もう一度周囲を確認する。素人の盗人のように。絵に抜き足差し足で近づいていく。透けて見えはしないかと屈んで角度を変えて試みるが中は見えない。一度他人の秘密を垣間見ると好奇心がかきたてられ無用の詮索をしたがるものだが、シュンも同じように気になってきた。布をあからさまに取ると巻き方がわからなくなったりしてはまずいと考え手に持って夕日の方向へ水平にかざして、透けて少しは見えないかと試してみた。

「コラ！」

と背中では大きな声が響き渡りシュンの背筋に電撃が走り痺れかける。振り向くとテルが浴衣姿で険しい顔をして睨みつけている。「ごめ……」謝りかけるシュンにテルは「置きなさい！ ゆっくり」と銃を手にしている犯人に拳銃を突きつける警官のように厳しく言い放ってくる。体を動かさないままゆっくりと絵を置く。「そこから静かに離れなさい」と言われ絵から離れるとテルが絵を丹念に調べ元の場所に戻した。

険しい顔は変わらない。髪は後ろで止められていて顔の険しさが余計によく見える。目は殺気立ち底なしのように深い。一步でも動こうものなら刺されそうな雰囲気だ。

「次やったら許さない。絶対に。一生許さない。わかったね？」

地を忍び寄ってくるかのような低い声でシュンを静かに脅し上げる。「は、はい」と閻魔に睨まれた小鳥のように震えながら返事をする。「ご、ごめんなさい」と畳に頭を擦り付けて謝った。

「シュン」と元の優しげな声が聞こえてくるが、冷たさを残している。

「頭上げなさい」と、お白州で奉行の審判を待つ罪人のような心地で言われたとおりに恐る恐る頭を上げる。仁王立ちで腰に手を当てているテルの姿は人を飲み込むような圧力感をたたえている。

「あのね、誰かの大事なものをきちんと守れる人になりなさい。見ちゃダメと約束したわけじゃないけれど私の大事な物だって言ったよね。そういうの、言わなくてもちゃんと守れるような強い人になりなさい。そうじゃないと、いざって時何かを犠牲にしなきゃいけなくなって大事なものを失ってってしまう。そんな弱い人になってしまったら誰かを恨んだり後悔してしまうから。ね、わかったわね」

「はい」と涙ぐみながら返事をする。

「強くなりなさい。強く。これから先できる大事なもののために。万が一の時、大事なものを傷つけるだけの人間にならないように」

「はい」と罪悪感と悲しみを地に打ち付けるように返事をする。シュンの背中を夕日が照らしほのかに暖める。テルは夕日を受けて山吹色に輝いているように見えた。

「もしやったらあっちに見える夕日まで蹴り飛ばす」

テルが指を指しながら言うので見ると、揺れたつ焰が海に沈もうとしていた。水平線の向こう側へ炎の血潮は吸い込まれていく。夜が夕日を抱き込み、星空のマントを広げていくようだった。

その後シュンは黙り込んで窓際で空を見ていた。反省することが多すぎて一度に狭い入り口にひしめき合って詰まり、どうしたらいいのかわからなくなりそうだった。

しばらくすると美也子が部屋に来て食事の時間を告げる。

「きたきたきたきたー！」とテルが満面の笑みを浮かべ用意された座布団に座る。立派な御膳が運ばれ美也子が料理の説明をするがシュンの頭の中には入ってこない。御膳の中でも少々変わっているのが「馬肉と湯葉の季節野菜サラダ」、陶板には鹿肉というシュンの食べたことのない肉が並んでいた。

シュンの反応の薄さを過敏に察する美也子は「こちらではね、最近馬肉や鹿肉をアピールしているのよ。シュン君は初めてだった？肉に火が通ったら焼きすぎないうちに、手元にあるソースにつけて食べてね」と丁寧に説明してくれた。

「凄いね。しっかりプロだね」と美也子の振る舞いを褒めるテル。

「お互いに頑張らないとね」と微笑で返す美也子。

二人のやり取りが理解できずにお預けをされたまま箸すら持っていいのか迷っているシュン。

「じゃあ、食べようよ」というテルの言葉にようやく箸を割り食べ始める。

「あ、テル。今日蚊帳つけてあげようか」と美也子が聞くと「あ、嬉しいな。それいいね。風情だよ。つけてつけて」とテルは喜んだ。

食事をしながら「お酒が飲みたいくなるねえ」とテルが言うので「持っているよ」とシュンがバックの中からブランデーを出すと「それ、どしたの？」と聞かれたので親父の棚から盗んできたことを告げた。一瞬テルが黙り込んだので、また怒られるのではないかと身構えたが「それは返したほうがいいよ。他人のタダ酒っておいしいけどさ、譲られたものじゃないと気まずいもんね」とニヤニヤしながら視線を美也子に向けると「もう、一杯だけだよ。明日もあるんだしね。シュン君はコーラか何かでいい？」と聞くので「コーラで」と控えめに答えた。「やった」と喜ぶテルを見ながら「駆け引きのうまい人だな」とつくづく思った。

用意された日本酒を飲み少し顔が赤くなるテル。食事が終わっても頬の赤みは取れない。色づいて見えるテルにまたも胸が締め付けられるシュン。美也子が布団を敷き、蚊帳をかける。何かに区切られた空間の中に一緒にいるという興奮がシュンを寝付けなくさせたが「明日早いから早く寝なさいよ。変なこと考えちゃダメだよ」とテルは早く寝てしまったが、その言葉のせいで余計に「変なこと」を意識する羽目になった。

鈴虫の音が聞こえる。綺麗な音だな、と命の豊富さに孤独がかき消されていく。時折寝相の悪いテルが寝返りを大きく打って掛け布団をめくり大の字になる。浴衣から素足が出て太ももまで見えている。目のやり場に困りながら何度も盗み見るが蚊帳が光を多少遮り暗闇のせいでよく見えない。窓から差し込む月明かりが少しだけ肌蹴た胸元を白暗く照らし汗ばんだ素肌を微かに浮かびあがらせる。見ているだけで体の一部が変化してくるのがわかり眠れなくなった。

朝テルが元気よく跳ね起きる。朝から飛びぬけて元気で今にも走り出しそうだ。「イヤー、よく寝たわー。快眠。あれ？シュン眠れなかったの？」と再度布団の底へと倒れ落ちていきそうなシュンが重い瞼を必死に開けようとしていた。昨夜シュンがどんな拷問を受けて苦悶していたかはテルはもちろん知らない。

食事を済ませ美也子に見送られ、バスに乗り込む。「今日は私たちの父さんと母さんに会わせ

てあげるから」とテルに言われ「実家？」と聞くと「実家っていうより、故郷かな。故郷に錦を飾るってね」と微笑む。意味がいまいち理解できなかったシュンは行けばわかるだろうと思っていた。

バスに揺られ三十分くらいすると到着する。林が多いが海の匂いもする。すぐ近くが海岸なのだろう。バス停から十分歩くと遠くに海が見えてきた。

「あ、ここだよ」と指を差すテルの前には木造の一階建ての建物が見えてくる。さらに奥には新しそうな鉄筋コンクリートの二階建てが見えてくる。

「ここも海が眺められるんだね」とシュンが聞くと「そうだね。こういうところで育つことができてよかったよ。毎日のように海見に行ったものね」と海へと遠い瞳を向けながら言った。

木造の建物からは子供の声が聞こえてくる。「父さーん。母さーん。ただいまー！」と声を上げると子供たちが真っ先にはしゃぎ声を上げてテルに抱きついてくる。みんな口々に「お姉ちゃん」と言っている。

「おお、輝実」と白髪交じりの背筋の良い男性が出迎えてくれる。その後ろから似たような年代の女性が「輝実、おかえり」と出てくる。「父さん、母さんただいま」と挨拶をしてシュンを紹介して世間話を始める。テルが「堀田晋さんと、玲子さんだよ。私の父さんと母さん」と紹介してくれ挨拶をしあう。シュンが周囲を見回していると集まってこなかった子供が数人いる。その子供たちはバラバラに動いていてシュンと目が合うと逃げるようにして走り去った。

テルが玲子と一緒に奥へと入っていく。テルに集まってきた子供たちもジロジロとシュンを見て少し警戒しているようだった。すると晋が「いやあ、すまないね。ここは親元で育てられることが困難だと判断された子供たちを受け入れる施設なんだよ。だから中には心に深い傷を負った子も少なくはないんだ。逃げてしまうのは悪気があってやっているわけじゃないんだ。許してあげて欲しい」と言ってきた。苗字が違うのも気になっていたシュンは「それじゃあテルもここに？」と聞くと「ああそうだよ。私は育ての親で血は繋がっていない。ここの子達もそうだ。でもここに入った限りはみんな家族だよ」と微笑んだ。

シュンにとっては察して理解するには衝撃が大きすぎた。「あの、つまり虐待とか受けて来た子とかいるんですか？」と遠慮なしに気になったことを聞くと「そういうこともあるね。色々なケースがある。ここに来る子供たちも年々増えている。悲しいことだね。ここは慈善家や財団の寄付金でまかなわれている。子供に悲しいことをしなければならぬ人もいれば、救おうと善意の行為を懸命に続けてくれる人もいる。養子として受け入れてくれる家族もある。輝美も今回多額の寄付をしてくれた。最初はまるで人形のように表情がなくて無関心で無反応だったけれど、今はあんなに活発な女性に成長している。人の底力に、いつも励まされる思いだよ」と答えた。

シュンは微笑をたたえる晋の話を聞きながら深く胸を打たれていた。テルの今までの行為や言動には深い意味があったのだと、ようやく理解できるような気がしていた。するとシュンの中で少しだけ「俺が守ってやりたい」という不遜な気持ちも出てきていた。

午前中はバーベキューをするというので手伝いをした。最初は小さな子供だけかと思ったらシュンよりも年上らしき人もいた。鉄筋コンクリートの建物から来ていた。「中高生は勉強していることが多いから自分の部屋にすることが多いの」と玲子が説明してくれた。年上の方は年下の子たちに指示をしたり動いていない子がいると「どうしたの？」と話を聞いたりしている。中には作業に加わらない子供もいたが、必ず誰かが寄り添って話を聞いている。その様子は作業をすることよりも一緒に何かをすることに重きを置いているようだった。無理に「やりなさい」と言う人は誰もいなかった。それぞれ自分たちのペースと相手のことを尊重しあっているようだった。その様子を見ながら、みんな境遇が似ているから思いやれることもたくさんあるのかな、と漠然と思っていた。

「シュン、働いてる？」とテルが聞いてくる。

「ちょっと大変かも」と汗を拭きながら返事をする。用意といっても三十人近くもいるのだから大変なものだった。バーベキューコンロが六台、墨の箱が五箱、テントにテーブルに椅子に飲み物。食材もある。シュンと似たような年頃の男の子が他に四人。女の子たちはおにぎりなどを作ったりしている。小さな子供たちはキャッキゃとはしゃいでいたり、ずっと座り込んで動かない子の傍にいたりして用意をする戦力にはあまりならない。小さな子に呼ばれたりすると大きな子も行ってしまうので一番物を運んだり火を起こしたりすることで働いたのはシュンだった。「みんな感謝しているよ」とテルが汗まみれのシュンの肩を叩くが「本当かなあ」と中々火のつかない炭に苦戦しながら答えた。

ようやく用意が終わり、みんなで肉や野菜を焼いていく。同じ年代の男の子たちとも共同作業を通じて話し合う仲にまでなれた。同い年の男の子と一番親しくなり、ここでの生活のことを話してくれた。受験生なので毎日勉強していて、将来は法律の勉強をして、いずれは政治の世界を目指したいと言う。様々な境遇の子供たちにもっと希望を持ってもらえる社会作りを目指したいのだと自信げに語った。話す内容がどれもこれも大人びていて、本当に同い年なのだろうかと思えるほどだった。「シュンくんは将来どうするんだい？」と聞かれて「いや君ほど大きな夢じゃないよ」と落ち込みそうな気持ちを抑えながら言った。「なんだよ。もったいぶることないじゃないか」と言われ「君に比べたらたいしたことないよ」とぼそりと念を押して言うことをためらうと首を振られた。「夢とか希望は比べるものじゃないじゃないか。誰かを幸せしたいという思いなんじゃないかな」と言われ、この子供たちはこうやって切磋琢磨して成長していているのだろうと強く感じさせた。シュンの夢には「誰かを幸せにしたい」という思いは特に強くなかった。好きになったものをとことんやってみたい、という気持ちだっただけに、やはり言っているのか迷った。

「音楽。音楽やってみたいんだ。今は誰かを幸せにとか、そういうこと、考えてないよ」

「いいことだと思うよ。僕は憧れるな。音楽する人。実は僕、指先とか不器用なんだ。だから好きなバンドはあっても、音楽をやる気にはならなかったな。最初から諦めたっていうのもあるんだけどね」笑いながら言う姿を見ていると、自分のやろうとすることや、やれなかったことにひとつも卑屈さがなくて羨ましかった。

食べ終わって今度は片付けに入ると焦げた網や鉄板を洗わなくてはならず、それも力仕事だった。体を動かしていると考える暇もない。ただもくもくと作業をしていく。結局終わったのは四時を過ぎていて片付け終わってドスリと外の椅子に腰を下ろしたシュンの前に玲子に手を引かれた男の子が俯きながら来る。

「ほら、自分で伝えてこそ意味があるのよ」と玲子に背中をそっと押されると男の子は「あ、ありがとう」と消え入りそうな声で言った。それ以上は言うことができずに黙り込んだ男の子に「え、えと、どういたしまして」と恥ずかしがりながら微笑んだ。一度も目をあわさず逃げるようにして去ってしまったが、きっとあの一言が男の子にとって精一杯のことだったのだろうと思うと勇気を振り絞って言ってくれた一言の「ありがとう」も十分な重みを持って琴線に響き目頭を熱くさせた。

「ありがとう。シュンくん。輝実が勝手につき合わせちゃって。大変だったでしょう。あんなに一生懸命やってくれて本当にありがとう」と重ね重ね玲子に言われ、照れくさくなって赤面してしまった。

尽くしたというつもりはなくとも、感謝してくれる人がいると、突然やりがいと充実感がみなぎってくることを込み上げてくる胸の熱さに手をあて感じた。晩御飯代わりにとバーベキューの肉や野菜で作った弁当をお土産に渡された。休憩時間中はテルが子供たちと遊んでいた。その間堀田夫妻と話していたシュンは、二人が何故この施設を作ったのかを聞くことができた。玲子が微笑みを崩さず話す。

「私たちは子供を授かることができなかったの。色々してみたんだけどね。それでどうしても私たち子供が欲しくて養子を一人もらった。その子は孤児で、事故で奇跡的に助かったのだけど、両親がお亡くなりになるまでずっと虐待を受けていたってある日告白されてね。私たちは本当にショックだった。全国の虐待されている子供たちのことに興味を持ってね。調べていくとたくさんいることを知った。その子たちをできる範囲で救えないだろうかと思って、この施設を建てることにしたの」

今では全国で講演活動を行ったり本を出版したりして忙しいことを話したがシュンが一番驚いたのは「私たちは子供を授からないことでこうしている。だから子供を持てなかったのも、幸運なことなのかもしれないわね」と言ったことだった。子供が欲しくてできない辛さがどれほどのことかシュンには理解できなかったが、今の自分以上に悩んだのだろうということは薄々わかった。自分も育ってきた境遇を「幸運だ」と思える日が来るのだろうかの一つ一つの話に頷きながら考えていた。

七時過ぎになるとようやく薄暗くなってくる。それでもまだまだ明るさが残っているが、せっかくのテルの出世祝いだから、みんなで花火をしようということになった。最初から最後までテルのためにお祝いのために用意されていたことだった。一人三本を持ち一斉に火をつけるのではなく順番につけていって長く楽しもうということで、順番に並んで火をつけた。

火をつけた人はテルに見えるように花火を見せる。まるで花を一本一本手渡ししていくように、一人一人がテルの前に立って花火を楽しむ。一人で行けない子には、誰かが一緒に行って花火をつける。細々としたものだったが、思いがこもっていて、美しく見えた。派手なばかりが美しさではないことを消えていく花火を見ながら感じていた。その花火の様子が心の様子のように見え、各々の思いを見せて、そっとテルに託していくような、祈りのようにも見えた。テルの顔は花火がつくごとに照らされ、暗闇に包まれ、また色を変えて照らされ、暗闇に包まれる。

みんな終わった頃、残りの置き型の花火にリレー式に点火して「おめでとう」の意味を込めた。「お姉ちゃんおめでとう」「テルちゃんおめでとう」「おめでとう」とみんなのおめでとうが吹き上がる花火の中で輝く。目頭をすっとぬぐっているようにも見えたが、暗闇と花火でよく見えなかった。

花火が全部終わると、暗闇の中で拍手が起こった。一生懸命手を叩いている子がいるというのが音でわかった。シュンには暗闇の中に響く拍手が、一番あたたかみがあって心に響いてくる気がしていた。

宴の後の静けさはいつも寂しい。あれだけ騒いでいたのに虫の声だけになる。テルは帰る前に海が見たいからと言って海岸に歩いていく。「シュン！」と声がするので走っていくと「今日はありがとう」と深々と頭を下げた。「こちらこそありがとう」と言うと「こき使ってやって感謝されるとはね」と嬉しそうに走っていった。「ついて来てよ」と声がするので追いかける。「暗いから足元気をつけるんだよー」と注意されながら追いかける。月の見える海岸線に向かって一緒に走る。好きな人と、一緒に走る。

細波の音が響き渡る。月が海面を滑って夜空に跳ね上げられたように浮かんでいる。砂浜の上にテルが座るので横に座る。

「昔ね、こうやって一人で見に来てた。私のこと誰も理解できないんだって、結構大きくなるまで思ってた、こうして一人になりたいくて、よくこうしてた」

「それって、本当の両親のこと？」と青白く照らされるテルの横顔を見ながら聞く。

「そういうのもあるけど、なんかもっと単純で複雑だったっぽい。十一歳の時まで、こういったら申し訳ないけど、酷い生活してた」

「虐待？」

「そう、だね。父が私が大きくなるにつれて、女として見る様になってきて、母は余計にヒステリックになっていったね。父の言うこと聞かないとぶたれるし、父の言うこと聞いたら母にはぶたれるし、どうしたらいいのかわからなくて、壊れかけていた。今の父さんと母さんがいなかったら廃人になっていたかも」

シュンはどう声をかけていいのかわからなくなって黙るしかなかった。

「母は今は再婚してどこかで暮らしているらしいんだ。もうどこへ行ったかわからない。父は二十歳の時会ったけど、襲われかけた。だから、もう、ちょっとさ、会えないなって。人生は進んでいくしかない。だからある意味どこにも不幸なんてない。むしろ今の両親のおかげで今の私がいる。そう考えるとやっぱり全部幸運かもしれないと強く思うんだ。人生、ちょっとやそっとのことで諦めるには早すぎるんだ」

テルが黙り込むと細波の音だけになる。きっと何度もここに心を洗いに来たのだろうとシュンは思った。

しばらく二人で月を見ていた。二人でいると思いが込み上がってくる。肩を抱き締め、口付けをしたい衝動が体中を揺さぶる。じっとテルの横顔を見つめる。テルが視線に気がつき見つめ返す。目が合った瞬間心臓が大きな音を立てて、息苦しくなる。テルの唇に視線がいき、余計に意識してしまう。ニッとテルが笑い「さあ、早く帰らないと心配するし、行くぞ少年！」と立ち上がる。「あっ」と声を上げて心の準備が無駄に終わったことを悔やむシュン。最後まで子ども扱いされることに寂しさと悔しさが入り混じり、砂を蹴った。

帰りは晋の車で旅館まで送られた。車の中であれこれと先ほどの海岸でどうしたらよかったかを作戦会議しだすシュン。まず告白からすればよかったのか、いやあの話の流れでは思い切って抱きしめればよかった、など妄想があれやこれやと喧嘩をしだす始末だった。文字通り「後の祭り」だった。「今日は本当にありがとう」と何度もお礼を言ってくる晋の話はあまり届いてはいなかった。

「また、いつでも帰ってきなさい。シュンくんも」と晋が優しい声を去り際にかけてくれたことが嬉しかった。テルには嬉しい日本酒のお土産まで持たせていた。美也子が「お帰りなさい」と出迎え、シュンの顔を覗き込み「コキ使われたんでしょ」と笑いながら言った。

風呂に入ると疲れがどっと出てきて体全体がほぐされていく。その後は前日のように興奮する余裕もなく死んだように眠った。

次の日、目を少しだけ覚ますと、体中が筋肉痛で錆び付いたブリキ人形のように動かすことができなかった。

「いつつつつつ……」と起きれないでいると、テルの布団は既に畳まれていた。蚊帳の外を見ると胡坐をかいて絵に向かっているようだった。既に緊張感が部屋中を満たしているのがわかった。背中だけでも話しかけられない雰囲気が出ている。一昨日怒られた時の殺気だったテルを思い出した。

どうしたらいいかわからずに着替えて部屋の外へ出ると美也子とちょうど出くわす。

「あ、シュンくん。テル、絵描いてるんでしょ？ああなったら誰も話しかけられないから、朝ごはんは座敷でお召し上がりになって」と座敷に通され一人だけ御膳を用意され申し訳ない気分になった。

御膳を用意し終わって部屋から出ようとした美也子に声をかける。

「あの、美也子さんも施設でテルと一緒に育ったんですか？」

「うん。途中までね。私はこの先代と養子縁組したんだけど、二年前心筋梗塞で亡くなっちゃったの。元々体の不調は感じていたみたいで、早く私を迎え入れたかったみたいでね。私が高校受験の年になる前には別れてたかな。五年前くらいから、また連絡取り合ってたっていう間柄。だから暗い時のテルが一番印象に残ってるかな」

美也子も苦労を重ねてきたのだらうと思ってみたが、どれほどの苦労かはやはり及びもつかなかった。暗いテルなど今からは想像だにできない。

「あとで、お弁当とお茶差し入れるから、テルにそっと差し出しておいて。日持ちするもの入れるから塩気の強いものとか酢の物になるけれど。シュンくんは別に御膳ご用意しましょうか？」

「いや、とても僕だけそんな。一緒のお弁当でいいです」

シュンが食べ終わり部屋に戻ると部屋は綺麗に片付けられていた。髪を後ろで結んだ浴衣姿のテルが布にくるまれていたキャンパスに向かっていて。布が横に打ち捨ててあるように広がっているのを見ると、慌てて包みを解いたに違いないと思った。目の前の全開にされた窓からは林を越えて海が見え、青々と水平線まで輝いている。

どのような絵を描いているのだらうとシュンが後ろからそっと覗き込む。その時明らかに変な絵だと感じた。すでに半分以上はできかけているが、とても目の前の風景を描いているようには見えない。時折ぐにやりと曲がっていたり、角ばっていたり、色もおどろおどろしい色から光が隙間から暗く射し込んでいるような感じもあり、全体的に印象が悪い。絵の知識のないシュンは「ピカソの絵をもっと酷くしたみたいだ」と思った。

「この絵はね、私の継ぎ接ぎみたいなものなの。青春の継ぎ接ぎ。一秒の継ぎ接ぎ。記憶や感情や思い出がこの絵の中に詰まってる。ずっと未完成で継ぎ足して、でも迷い込むように完成に近づかなくて。誰にも見せたくなかった。でも今ならできそうな気がするの。だから黙ってて」

一言も喋っておらず絵を覗いただけで「黙ってて」と言われたシュンは座って待つことにした。昼ごろになり美也子が重箱と竹筒に入ったお茶を差し入れとして出して、静かに去った。シュンが「お弁当」と想像するものより相当かけ離れている豪勢なものだ。

そっと後ろからお弁当とお茶を差し出すと、お茶だけを飲んでキャンパスに向かう。部屋が昼を過ぎてくるとだんだん暑くなって勝手に汗が出てくる。シュンは美也子にお茶を頼み、多めに取ってきた。

帰ってくるとテルの首筋が汗で濡れている。お茶が空になっていると思い継ぎ足してそっと出す。まるでアシスタントみたいだとシュンは思った。

昼を少々過ぎるとテルが「くそっ！」と叫んだ。「暑すぎる！」と突然浴衣の上半身を全部肌蹴させた。

シュンの目の前に下着もつけていないテルの汗ばんだ背中がさらけ出される。「あっ」と叫びそうになったシュンは大きく息をし、呼吸を整える。艶めいて動くテルの背中に圧倒された。テ

ルの背中からは汗がスルリ、スルリと美しい背筋や肩甲骨に垂れてきているのがわかる。それでも、背中から刺すような気迫が肌にビリビリと伝わってきて痺れるほどだった。

ふと、筆の動きが止まる。胡坐をかいたまま微動だにしない。その状態で三時間近くも過ぎた。シュンはお腹が空いてきていたが、師匠がお弁当に手をつけもしないのに自分だけが食べるわけにはいかない、という心境で、じっと待っていた。

少しずつ日の傾きとともに海岸や海の色がほんのりと変化していく。夏らしいきつい光の様子から、夕方にかけるまでに淡くなっていく。ようやく夕闇の色が空を浸し始めた頃、テルは最後に空のような明るい青で、すうっと柔らかく線を引いた。新しい光が差し込んだかのように、筆がキャンパスを流れていった。

「できた」

その声の後、しばらくテルは沈黙していた。長い長い息を吐いて、吐いて、吐ききって、肩や背中から緊張の色が抜けていく。シュンも思わず唾をゴクリと飲んだほどだった。

「できた」

もう一度言って肌蹴た背中そのまま立ち上がる。そしてシュンへとそのまま振り向く。

汗ばんだ形の良い乳房が濡れて光っている。上半身がオイルを塗ったように汗で艶めいていて、まるでその姿そのものが一枚の絵画のようであった。引き締まった体にはいやらしさがなく、純粋な感情だけがそこに象徴としてあるようだった。シュンはそこに磨ききられた一つの芸術品を見ていた。

「さあ、お腹すいた。みゃーこに言ってこよう」

とそのまま部屋を出ようとするので慌てて「浴衣浴衣」と言うと気がついて「あれ？忘れてた」と浴衣を羽織りだした。

シュンはテルの集中力の凄さに改めて驚いていた。動いただけで「黙れ」と言うのも充分納得できる話だった。

その夜は美也子が鯛をつけてくれた。お昼のお弁当は「夏だし何かあったら困るから」と言われ下げられてしまった。昨日晋がくれた日本酒もテルは遠慮なく飲んで上機嫌だった。

「しゅーん、ありがとう。ほんとにありがとう」と手を握られるので理由を聞いてみると「いいのいいの」と話してくれない。「うふふ」と笑って顔も初日より赤い。「俺も飲んでいい？」と言うと「子供が大人ぶったらろくなことにならないよ」と言われ少し腹が立った。

このままではいつまで経っても子ども扱いをされてテルとの距離が縮まらないと判断したシュンは「俺、テルのこと真剣に考えてるんだ」と告げた。テルはぐいっと杯を傾けながら「何を考えてるって？」と酒臭い息を吹きかけてくる。「テルのこと好きだから、ちゃんと守りたい」と告白する。「ナマイキ」の一言で一蹴される。

「奢ってもらってる身分で生意気」とさらに言うのでシュンはバックの中の財布からお金を十万出してくる。「何これ」と不機嫌そうに聞くテルに「自分の分くらいは自分で払うよ」と言う。「そういうところが生意気！何もわかってない！しまいなさい！」と怒鳴られた。

「鯛、余ってるから食べなさいよ。こういう時にシュンと食べられるのは、本当に幸せなことなんだから」

怒ったり優しくったりテルの気持ちがシュンにはよくわからなかった。それでも強烈に惹かれていった心に戻ってこいと言ったところで、好き勝手にやっている暴れん坊が素直に戻ってくるはずがなかった。恋心はいつだって制御して進めていくものではない。

美也子が様子を見に部屋に入ってくる。

「テル、酔いすぎだよ」と声をかけるが「いいの。こんな日はもう一生に一度しかないよ。だからいいの」と体を揺ら揺らさせながら言った。ため息をついて「しょうがないな。もう」と言って懐から薬を出してくる。「これ二日酔い止めの薬、もし辛かったら飲んで」と置いていってくれた。

食事が片付けられた後でもテルはちびちびと杯を傾け、日本酒を手放すことがなかった。

布団が敷かれ、蚊帳がかけられる。外から見ると夫婦のような閨に改めて恥ずかしさを覚えたシュンは月見酒を楽しんでいるテルの傍で一緒に月を見る。部屋を暗くして見ているので、晴れ渡った夜空の星々が綺麗に輝いていた。

「明日になったら、家に帰んなさい」

とテルが言うので驚いて「いやだよ。俺も一緒にテルと行くよ」と言った。引き裂かれてしまいそうな悲しみを止めるのに必死だった。

「もう少し大きくなりなさい。自分で自分のことができるくらい、自由になりなさい。シュンには学ぶべきことがたくさんあるのだから」

「俺一生懸命やるよ。テルと居たほうが学ぶこともたくさんあった。数日だけど人生の中で大事にできることたくさん教えてもらったよ。あんな間違っただ親のところに戻るより……」

シュンの話を悲しそうな目で見つめ遮り「あのね、親は間違っているとか、合っているとか、そういうことじゃないと思うの。自分なりに育ててもらった人への感謝というものを、ほんの一握りでも持っていなければならないと思う。そして自分なりに伝えていくべきだと思う。たとえそれが通じなかったとしても。もし通じなかったとしたら、自分の心の中だけにしまっておけばいい」

「テルみたいに？」

シュンの言葉にテルは別のものを飲み込むように酒を飲んだ。

「俺、テルのこと満足させられるように頑張るよ。何だってできる」

「何を言ってるの」

カタリと杯を置いてシュンを睨みつける。シュンはひるまない。

「俺テルのこともっと知りたい。抱きしめたいんだ。テルを幸せにして安心させたい」

「生意気言わないで。童貞のくせに」

「童貞じゃないよ」

「え？嘘。今の子って早いね」

目を真ん丸く見開いてシュンを見つめる瞳に余計に愛おしさを感じた。

「嘘じゃないよ。テルのこと抱けるよ。どんなことでも満足させたいんだ」

「ふざけないで」

明らかにテルの棘が鋭くなってきていた。それでもシュンは自分の気持ちを止めることができなかった。

「ふざけてなんかない。俺はテルのこと愛してる！」

人生最大の告白をテルは張り手で返した。シュンの頬がジンと痛む。テルは立ち上がり、息を荒くして涙ぐんでいた。

「覚悟もないのに、中途半端に背伸びして愛してるなんて軽々しく言っちゃいけないのよ」

負けるものか、という意地だけがシュンを突き動かしていく。

「覚悟はあるよ。背伸びなんかじゃないんだ。俺何でもできる。抱けるよ。満足させられる」

「ふざけないでって言うてるでしょ！」

怒号を放ってからテルは浴衣の帯を解き、浴衣を床へとはらりと落とす。酔っ払っている勢いも重なり履いていたショーツも脱ぎ去りシュンに叩きつけ全裸になる。夜の光がテルの全身を浮かび上がらせ爪を立てて肌を危うくなぞっている。

「あんたに大人の女が抱ける？体だけ抱くのとは違う！満足もさせられないくせに生意気言わないで。背伸びっていうのはね、中に足浮いているようなのは背伸びって言わないの。ただの夢なのよ。地にちゃんと足つけてないと背伸びとも言えないの。思い上がりすぎだよ。あんたが勝手に満足するのが満足じゃないし。私も納得しなきゃ満足に心を抱くことすらもできないのよ。ちゃんとそういうのわかるまで大人になりなさいよ。そして私が惚れるような男になってごらんなさい！」

「俺、俺……」とシュンの憤りは破裂してテルを押し倒す。手首を握り畳へ押し付ける。裸のままのテルがシュンの下になり甘い香りを放っている。あらわになった乳房が呼吸で大きく膨らんでは縮まる。

「バカな男。私が父に会った時、レイプされかけたってはっきり言わないと、あんた何も理解しないわけ？」

「え？」と驚いて手を離し「ごめんなさい」と謝り目もあわせられなくなる。

「シュン」と声がして手がずっとシュンの両頬に添えられ、引き寄せられる。

「これで許してね……」

シュンの唇に一瞬テルの柔らかさと香りが重なっていく。

キスは、ほんの一瞬だった。一秒もなかったかもしれない。その一秒の、永遠とも言えるような時間は、月の光よりも切なげに、そして優しく、シュンの心に焼き付いていった。悲しみとも喜びともわからない心で窓の外を見ると、海が穏やかに揺れているのがわかった。その後テルは月を見ながら裸のまま飲み続け、シュンは「今日は寝なさい」と言われ布団の中でそっと涙を流しながら眠った。

次の朝帰る支度をする。シュンは時間が止まってしまえばいいと思った。ここから離れてしまえばすべてが壊れてしまうような恐怖感すらあった。最後の御膳は口の中で味がなくなるまでよく噛んだ。一秒でも長く一緒にいたいという思いが膨れ上がってきて爆発して涙となって瞳から漏れ出しそうだった。

美也子が「またおいでね。シュンくん」と笑顔で送ってくれた。バスの中、テルと一緒にいても、何を話していいかわからない。一言喋ろうものなら、泣いてしまいそうだった。

テルは布にくるまれた絵を大事そうに抱えて、話しかけてくることもなかった。

ついに何も話せないまま、何も伝えられないまま、駅へとついてしまう。長いようで、短いバスの時間はあっけなく終わってしまう。「どこまで行くの？」と聞かれ答えるとテルが切符を買ってくれる。「はい」と手渡し、テルはにこやかに言う。

「シュンは行きの切符だけ買ったことになるね。まだシュンの旅は終わってないんだよ。みんな勝手に行きの切符渡されて生きているようなもんだしね。だからシュンもちゃんと生きていくんだよ。私も頑張るからさ」

テルの言葉にどんな言葉で返していいかわからなかった。ただ一言「本当にありがとう」と言うしかなかった。「連絡先とか」と言おうとすると「もしさ、縁があれば、また絶対会えるよ。だから縁を信じようよ」と言って抱きしめられ、会った時とは違う花柄のプリントTシャツがシュンの胸に重なっていった。今まで大きく見えていたテルが、この瞬間だけ同じ背丈だと感じた。

「来たよ。私逆方向だから、ここで、お別れ」

一瞬、寂しそうな瞳を見せて、すぐに笑顔になり、近づく列車の切なさに胸が締め付けられていくシュンの姿を小さく手を振りながら見送る。

シュンが列車に乗り込む間にシュンは言う。

「一緒にすごした一秒一秒を永遠に覚えておく。その力でずっと生きていく」

「素敵だね」

麦藁帽子姿で見つめるテルの声とともに扉が閉まる。列車が動き出し、テルが見えなくなる。シュンを追いかけるようなことはなかった。

列車が見えなくなった頃、そっと指先を唇に当てていたテルのことをシュンはもちろん知らない。